

第4章 アプローチカリキュラム

1 アプローチカリキュラム

横浜市では、小学校への接続を意識した、年長児後半のカリキュラムをアプローチカリキュラムとよび、取組の充実を図ってきました。アプローチカリキュラムは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりとしながら、幼児期にふさわしい生活を通して、この時期ならではの資質・能力を育み、小学校の生活や学びにつながるように工夫されたカリキュラムです。小学校への適応を目的にして、知識や技能を一方的に教え込むことではありません。

市内の各園と小学校との交流活動は、30年以上前から活発に行われ、子どもが安心して就学できる環境を整えてきました。こうした強みを生かして、子どもの交流や職員連携を一層充実させ、カリキュラムの接続を通して、子どもの育ちと学びをつないでいく必要があります。

(1) アプローチカリキュラムで育てたい子どもの姿

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と重なります。

(2) アプローチカリキュラムのねらい

- ① 学びの芽生えを大切に活動を通して、知的好奇心を育み、自ら学ぶことができるようにします。
- ② 協同的な活動を通して、人とのつながりを実感し、友達とともに目標を達成する喜びを感じることができるようにします。
- ③ 自立心を高める活動を通して、成長を実感し、自信をもって新しい生活をつくり、安心して就学できるようにします。

2 アプローチカリキュラムで大切にしたい活動

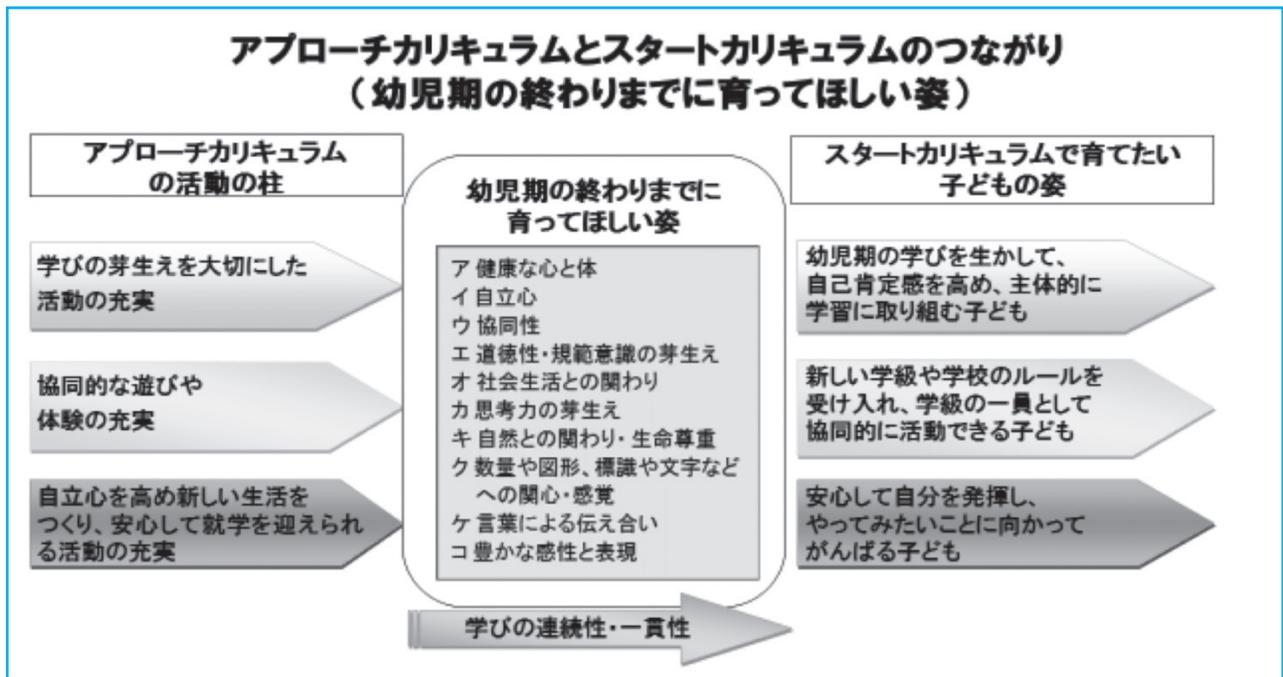
年長児の発達特性をふまえ、アプローチカリキュラムに活動の柱を3つ位置付けました。これは、小学校のスタートカリキュラムにおける活動につながるものです。

アプローチカリキュラムの活動の柱

- (1) 「学びの芽生えを大切に活動の充実」
- (2) 「協同的な遊びや体験の充実」
- (3) 「自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実」

年長児の発達特性 (平成20年告示保育所保育指針)

これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身共に力があふれ、意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な経験を通して自立心が一層高まっていく。



(1) 学びの芽生えを大切に活動の充実

学びの芽生えとは、学ぶことを意識しているわけではないけれども、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、結果的に様々なことを学んでいる姿のことです。

子どもは、遊びに没頭する中で、気付いたり、できるようになったりし、知識や技能の幅を広げていきます。また、「もっとこうしたい」「こうなりたい」という思いや願いをもち、試したり、工夫したりする中で、思考力の基礎を育てていきます。思いや願いの実現に向けて、問題を解決しなければならない場面では、これまでの経験で知っている知識や技能を組み合わせ、友達と協同して問題を解決しようとします。その場で解決できない問題については、自分で調べたり、人に尋ねたり、あるいは繰り返し取り組んだりして、粘り強く解決しようと努力します。

やりたいことに向けてがんばる経験を積み重ね、達成感や満足感を得ることで、学びに向かう力が育まれ、小学校での教科の学びにつながっていくのです。

この過程で、「話す」「聞く」「読む」「書く」などの言語活動を意識することで、子どもが言葉への興味を広げ、自ら文字を書いたり、本を読んだりする意欲を高めていくことができます。

学びの芽生えを大切に活動の充実させるには、遊びの中で子どもが興味を示したことや、夢中で取り組んでいることをしっかり捉えることが大切です。また、普段の遊びや生活の中でのつぶやきや会話、活動が、どのような学びにつながっていくのかを見とる保育者の目も大切です。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりとすることで、目の前の子どもの活動が、どのような学びの可能性をもっているのかを考えるヒントになります。

事例 5歳児「きゅうりがうまく育たない」

社会生活との関わり

自然との関わり・生命尊重

思考力の芽生え

年長児になると、自分たちで育てたい野菜を決めて、そのグループごとに野菜を栽培します。きゅうりを育てるグループが、苗をプランターに植えて世話をし始めたのですが、葉は白くなり、苗が一向に大きくなりませんでした。担任は、新たな苗を買うということも視野に入れていたのですが、二人の女

の子はどうしても、今ある苗を育てたいとあきらめません。二人は、園の図鑑を調べたり、栽培に詳しい保育者に育て方を聞いたりして、どうしたら苗が伸びるのかに一生懸命でした。

この時期に、たまたま小学校との交流授業があり、図書館で司書の先生から図書館の説明とともに「何か質問がありますか」という問いかけがありました。そこで、すかさず手を挙げたのが、きゅうりを育てたい二人でした。「きゅうりの病気が載っている本はありますか？」という質問に、司書の先生が、野菜の病気のことが書いてある図鑑を渡すと、二人は「小学校ってすごい」と感激していました。

ただ、病気のことが書いてある図鑑は見つかったとしても、きゅうりの病気が治るわけではありません。担任は悩んだ末に、農業を営んでいる昨年卒業した園児のお父さんに連絡をして、きゅうりの育てているところを見せてもらうことにしました。農家に行くと、早速、きゅうり畑に連れて行ってくれて、青々と育ったきゅうりをみせてくれました。それだけでも子どもたちは大興奮だったのですが、さらにきゅうりをもがせて食べさせてくれました。

結局、自分たちで植えたきゅうりは育てられなかったのですが、育てることに夢中になった二人にとっては、学びが多い、そして印象に残るきゅうりの栽培となりました。



(2) 協同的な遊びや体験の充実

年長児は、個人差はありますが、発達段階として気の合った仲間同士の活動だけでなく、クラスで共通の目的を意識したり、自分の役割を理解したりして「集団の一員としての自覚」をもって活動するようになります。一つの目的に向かって、グループやクラスなどの集団で取り組む活動の中で、みんなで協力し合うことの楽しさや、ルールの大切さ、責任感、達成感を感じ、集団の一員としてのつながりを自覚するようになります。

活動の中では、話し合いの場面を大切に、友達や身近な大人との関わり方を学べるようにします。中でも、主張が対立したり、思い通りにならなかったりする葛藤場面に丁寧に関わることで、相手と折り合いをつける力や、感情をコントロールする力を身に付け、社会性を高められるようにします。近年注目されている非認知能力を育む上でも、協同的な遊びや体験の充実は重要な役割を果たしています。

事例 5歳児「遊びから始まったリレー」

運動遊びが好きな子を中心にリレーがブームになり、運動会でも「リレーがしたい」ということになりました。クラスで勝負をしていく中で「悔しい」「勝ちたい」という思いが芽生え、どうしたら勝てるのかをチームで話し合いました。バトンの渡し方を工夫したり、走る順番を入れ替えたりする作戦を立てました。そして、かけ声や応援などを通して互いに気持ちを高め合い、悔しい気持ちや勝てたときの喜びを共有する中で、チームとしての一体感が高まっていきました。リレーの練習過程では、相談する、友達に分かるように自分の思いを主張する、走る順番を巡って折り合いをつけるなどの経験をしながら、試行錯誤し、より早く走ることができるようになっていきました。

協同性

道徳性・
規範意識の
芽生え

言葉による
伝え合い



一方で、勝負が白熱してくると、勝ち負けにこだわり、負けたチームからは「○○が転んだから負けた」とか「遅いよ！」など、友達を責める言葉も出てきました。保育者は、衝突や相手を尊重しない発言が見られた時には、相手の気持ちを推し量ったり、思いやりの気持ちをもって励ましたりすることの大切さを丁寧に伝えていきました。責められた相手の気持ちを考え、自らの関わりを振り返る場面をつくることも大切にしていきました。

作戦会議の中で、走るのが速くない子どもが「私は、足が遅いから・・・」と自信なさそうに発言したときには、「じゃあ、速い人の間に入って走ったらどう。安心じゃない」と応じる子どもがいました。勝負を前に「僕、抜かしたこと1回もないんだ・・・」と緊張気味の子どもには「そんなことはないよ、この前抜かしてなかった？今日は、本気で思い切り走って抜かしてみたら」と励ます子どももいました。保育者は、相手の立場を尊重し、思いやる子どもの姿を認め、みんなに知らせていきました。

このような経験を重ねることで、相手の立場に立って物事を考える力が育まれ、勝負の勝ち負けだけでなく、力を出し切るの意味や価値を見出していきます。

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを伝え合い、葛藤を乗り越えながら、共通の目的に向かって、考えたり、工夫したり、協力したりする協同的な学びは、小学校の教科学習にも十分に生かされていきます。

本事例からもわかるように、ただ、一緒に遊んだり活動したりすれば協同的な学びになるわけではありません。子どもたち一人ひとりが「○○したい」という思いや願いをもち、共通の遊びや活動に熱中していることが大切です。

協同的な遊びや学びを成り立たせるためには、保育者の援助が欠かせません。援助に当たっては、一人ひとりの子どもの思いを理解し寄り添うことが求められます。友達のよさや持ち味を理解しながら、互いに認め合い、助け合う集団を形成していけるような援助こそが大切です。

(3) 自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実

年長児は、これまでの体験から、予想や見通しを立てる力が育ち、心身共に力があふれ、意欲が旺盛になります。また、自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになります。こうした力が高まる年長児後半では、それにふさわしい環境を整え、意欲や自立心をさらに高める活動を工夫することが大切です。

一方で、先の見通しをもつことで、就学に不安を覚える子どもが出てきます。就学通知が届く10月以降、不安が体に現れる子どももいると聞きます。こうした不安を乗り越えるためには、周囲の大人が子どもの気持ちを受容し、応援することが大切です。心に応援団をもった子どもは、変化の大きい接続期を自分の力で乗り越え、新しい生活を創り出していけるようになります。

小学校との交流を通して学校生活を具体的にイメージできるようにすることも、不安を解消する有効な手立てです。小学生との交流を通して期待をもち、安心して就学を迎えられる活動を充実させていきましょう。

事例 5歳児「チアダンス発表会」

協同性

自立心

言葉による
伝え合い

習い事でチアダンスをしているJさんが、アイデアスケッチに「ズートピアの音楽で、仲良しメンバーと可愛い衣装を着て踊りたい」という思いを書きました。これをきっかけに、遊びの実現に向け、自ら活動し始めます。以前運動会で使ったポンポンやCDの保管場所を保育者に聞いて道具をそろえます。そして、友達を誘い、園庭で踊りを一緒に楽しみ始めました。

いつもリードするような女の子達が「J先生、お願いします」「教えて」と言って真剣にレッスンを受けています。参加したメンバーはチアダンスに熱中し、本気で上達したいと思っているようです。

それぞれの得意分野によりリーダーが変わる姿が見られ、お互いの良さを認め合っています。保育者は、入りすぎないように意識しながら見守り、必要な時に支援するようにします。

チアダンスに夢中になっている子どもたちは、上手になるためのトレーニ



ングやストレッチを考案しました。ダンスをした後は桜の木の下で集合！「はいこれからトレーニング、ストレッチを始めます」

「トレーニング結構きついけどがんばろうね」とYさん。Kさんは「わたし、登り棒きらいだけど、チアうまくなるためにがんばるしかないっか！」とつぶやきながら取り組んでいます。遊びの中に自然と身体づくりに必要な運動が盛り込まれ、体力アップにつながります。

保育者は、「よい考え！」と認め、遊び込める時間を確保し、見守ることで、自発的遊びが次々生まれます。何でも遊びにする子どもたちを、素直に「おもしろい」と感じることで、子どもたちが自信をもって過ごすことができるようになります。

ドッジボールをしている子どもも、そのトレーニングする姿に刺激を受けて、遊びを中断し、トレーニングタイムをとります。そして、ここから様々なトレーニングが生まれました。「腕立て伏せ」、「ジャンプ10回」、「走り込み！」体操教室に通っている子どもたちが友達に教え始めます。教えたり、教わったり影響を受け挑戦する姿を保育者は認め励まします。



「発表会をしよう」というアイデアがもち上がりました。子どもたちは早速、チアダンスチーム名、いつ、どこで発表し、誰を誘うかなどを相談し始めます。そのうち「園長先生も一緒に誘おう」という話になり一緒に踊る計画で園長先生を誘うことに。

ホールでゲーム遊びをしようと思っていた担任が知らない間にチアの計画が進んでいきます。「ゲームの時間を使い発表したい」と子どもから交渉され、担任は予定を変更し、急きょ発表会を開催することにしました。

保育者が、「今」「この瞬間」を見逃さず、柔軟に対応することで、子どもに満足感、充実感が得られ、次への意欲につながります。

発表会が始まりました。司会も、お客さんの呼び込みも自分達で行い、握手会の計画も立てその場でお客さんを案内します。「好きな人とあくしゅができますよ」と声をかける子も……。こうして、握手会まであるチアダンス発表会が実現しました。

遊びはまだまだ発展します。その後、「運動会でチアダンスを踊りたい」ということになり、フォーメーションを描いたり曲目リストを作ったりし始めます。「今年の運動会の場所はどこ？同じ？」と保育者に確認する積極的な姿が見られます。行事は日々の保育の延長線上にあります。子どもの声に耳を傾けながら進めることで運動会も主体的なものになるのです。



◆推進地区の交流事例

年間を通して様々な交流を計画することで、園児が学校生活をイメージできるように工夫し、安心して就学を迎えられるようにします。（施設開放等、特色ある交流事例は第7章に掲載）

年間を通した年長児と1年生の交流

1回目は何気なく交流し、2回目は保育園に来てもらって自己紹介を
し合ったところ、同じ名前の子がいて喜び、すぐに名前を覚えていました。
保育園という自分たちの領域に来てくれたことで、園児も照れながら1年
生を真似て自分の名前を伝えられました。保育園では一番上でも、学校
で教えてもらうことや助けてもらう経験をしたことにより、してもらっ
たことを小さい子にもしてあげようという姿が見られました。



2回目の交流では園児になじみの遊び、「じゃんけん列車」や「なべな
べ」をして楽しみました。1年生に親しみ、帰りは保育者が何も言わなくてもテラスまで見送り、もっと
見送りたいと靴を履いて玄関口まで数名が追いかけていました。門の柵ごしにいつまでも手を振り名残
を惜しむ園児の姿が、それほど親しんだのかと、印象的でした。



この交流で小学生や学校の先生と顔見知りの関係が広がり、就
学時の安心感につながったと思います。学校では楽しいことがある
と感じ、「来年から小学生になる」という期待が高まったりして、
小学校生活の見通しをもつことができました。年長児にはどのく
らいのことがどこまでできるのかを、小学校の先生に見ていただ
けたことで、新しい環境へのギャップを埋めることもできたので
はないかと思います。小学校を訪問させていただくことにより、
卒園した子どもたちの姿を見る機会にもなりました。

年長児と5年生の交流（造形あそび）

今年度、2回目となる交流活動は、昨年からはまった、5年生と年長児による交流活動です。5年生
と交流を行うと、入学したときに6年生になっているため、ペア学年として安心してお互いに関わり合
うことができます。小学校の重点研究で取り組んでいる、図画工作科の造形遊びを5題材、行いました。
形や色で遊ぶのは園児も大好きです。5年生は他者を思いやりながら活動することができました。



6色、約5千個のカラー
コップを並べたり、積ん
だりする造形遊び

6色、約1万本の蛍光絵の
具で着色した割り箸を積
み上げる遊び



年長児と1年生の交流（生活科の秋の遊び）

「秋といっしょに～にこにこ秋ランドへようこそ～」ど
んぐりやまつぼっくり等を使っておもちゃやゲームを作
り、秋ランドを開き、園児と交流しました。この頃になると、
1年生の姿に、園児を励ましながらかにできるようになっ
たことを喜ぶ様子が見られました。

ひもをむすんだら
かんせいだよ！



秋のお店屋さんを通しての交流

ボールをこうやってもつとやりやすいよ

落ち葉やどんぐりを使い9つのお店屋さんを開きました。

交流を通して年長児は学校生活の様子を知り、1年生に優しく接してもらうことで安心感を得ることができます。



その他の交流事例

【給食交流】

年長児と保護者が学校に対して抱く不安の一つに給食があります。「好き嫌いなく食べられるか」「時間までに食べられるか」「量が多くないか」などの不安を解消するために、給食交流を行っている学校もあります。



【入学説明会での交流】

1月下旬から2月中旬に行われる入学説明会では、保護者とともに子どもにも一緒に学校に来てもらいます。保護者が説明を聞いている間に、前半は、1年生が、学校探検で学んだ学校のおすすめポイントを中心にグループごとに校内を案内します。後半は、4月の入学式で案内役を務める5年生が、入学してくる子ども達のために考えた遊びで楽しい時間を過ごします。



コラム

幼保小の交流活動

横浜市の幼保小連携実態調査（29年度実施）では、全ての小学校が幼稚園や保育園と交流しているという結果が出ています。また、幼稚園や保育園でも98%以上の園で交流を実施しています。年長の後半になり、「学校に行きたくない」と言っていた子どもが、小学校との交流を通して安心感をもち、小学校へ行くのが楽しみになったという例も聞きます。不安に感じていた小学校を実際に見て、1年生と一緒に遊んだり、高学年の児童と関わったり、学校探検をしたことがきっかけでした。交歓給食での楽しさが学校への期待を膨らませた、という子どもたちもいます。子どもの気持ちに寄り添い、互惠性を考えた交流活動を計画し、小学生との関わりを楽しみ、徐々に安心していける交流にしていきましょう。

就学への期待をもつ活動は、小学校との直接的な交流活動ばかりではありません。散歩の途中で学校に寄りたり、チャイムの音を聞いたり、小学校の先生や子どもたちからの手紙を読んであげたりと、様々な方法でアプローチすることができます。

また、午睡の時間を少しずつ短くしたり、時計を見ながら時間を意識させたりなど、生活リズムや生活習慣においても小学校へのスムーズな接続を図る工夫があります。

3 アプローチカリキュラムの作成

(1) 現在のカリキュラムを見直すことから始めましょう

各園で作成する年長児の指導計画は、園の方針や地域、施設、園児の実態により当然異なりますが、指針・要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にしながら、小学校との円滑な接続を意識したカリキュラムになっているか、見直していきましょう。

(2) アプローチカリキュラムの作成例の見方（巻末資料参照）

★の部分各園で作成		アプローチカリキュラム作成例												平成29年度版			
		0歳～1歳児	2歳～3歳児	4歳～5歳児	6歳～7歳児	8歳～9歳児	10歳～11歳児	12歳～13歳児	14歳～15歳児	16歳～17歳児	18歳～19歳児	20歳～21歳児	22歳～23歳児	24歳～25歳児	26歳～27歳児	28歳～29歳児	30歳～31歳児
共通部分	育むべき資質・能力	生きる力の基礎 5領域の学び ◎健康・人関係・表現 ◎心身・技能の基礎（気持ち、できるようにすること） ◎思考力・判断力・表現力等の基礎（試し・工夫すること） ◎思考力・判断力・表現力等（やってみよう！に向けてがんばること） ◎未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」												生きる力 ◎生きて働く「知識・技能」 ◎未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」			
	活動の柱	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 健康な心と体 自立心 協同性 逞性 規範意識の芽生え 社会生活との関わり 思考力の芽生え 自然との関わり 生命尊重 職業や役割、徳義や文字などへの関心・感受性 意欲と好奇心の芽生え 豊かな感性と表現力												スタートカリキュラム 幼児期に備え付けた力を発展させて、各教科等の学習に円滑に移行し主体的に学ぶことができるようになります。 学年の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようになります。 安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己展開できるようにします。			
各園で取り組む部分	配慮事項・環境構成	アプローチカリキュラム ◎人とつながりを実感し、友達とともに目標を達成する喜びを感じることができるようにします。 ◎成長を実感し、自信をもって新しい生活をつくることのできるようになります。 ◎小学校との交流を通して、安心して就学できるようにします。												円滑な接続 幼児期に備え付けた力を発展させて、各教科等の学習に円滑に移行し主体的に学ぶことができるようになります。 学年の一員としての自覚をもって、協同的に活動することができるようになります。 安心して学校生活をスタートし、集団の中で自己展開できるようにします。			
	主な活動	スタートカリキュラム ◎人とつながりを実感し、友達とともに目標を達成する喜びを感じることができるようにします。 ◎成長を実感し、自信をもって新しい生活をつくることのできるようになります。 ◎小学校との交流を通して、安心して就学できるようにします。												小学校の一日 先生や学校がどんな人、どんな人が安全を思ってくれています。 なかよしタイム 小学校の先生や友達と楽しく遊んでみるよ。 くもんタイム 小学校の先生や友達と一緒に読書や算数などをするよ。 わくわくタイム 小学校の先生や友達と一緒にゲームや運動などをするよ。			
保護事項	保護事項	◎保護者の安心のために小学校ともに取り組むこと ◎保護者や小学校行事への積極的参加 ◎保護者や小学校行事への積極的参加												保護者の安心のために小学校ともに取り組むこと ◎保護者や小学校行事への積極的参加 ◎保護者や小学校行事への積極的参加			

■共通部分

幼児期から一貫して「育むべき資質・能力」を3つの柱で整理し、幼児教育部分と小学校以降の教育部分に分けて示しました。接続期には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がキーワードとなることから、10の姿を位置付けています。年長児の発達特性をふまえて充実させたい「活動の柱」とねらいをABCの3つで示しました。この内容は、共通項目としています。

■各園で取り組む部分（★印）

「主な活動」は、各園で年長児後半に行われる活動を記入します。これまでの保育を「活動の柱」やねらいに沿って整理しますが、子どもの活動には様々な要素が含まれることから、一つの活動が、一つの柱に対応するとは限りません。

「配慮事項・環境構成」は、特に年長児後半に伸ばしていきたい姿や、小学校との接続を意識した内容等を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）との関連で記入します。

「幼保小連携」の項目には、小学校との交流や連携、また近隣の園の年長児同士の交流なども記入します。「家庭との連携」は就学に向けて、家庭と連携を強めていきたい内容を記入します。

■小学校スタートカリキュラムの部分

育ちと学びをつなぐためには、保育者が小学校生活への見通しをもって保育していくことが大切です。スタートカリキュラムのねらいや概要を示したのは、そうした意味があります。

ここに示したアプローチカリキュラムは作成例です。各園で小学校との接続を意識した年長児後半の工夫されたカリキュラムを作成する折に御活用ください。※データはこども青少年局保育・教育人材課のホームページからダウンロードできます。